

一代交配

# ほれまるミニトマト

## 栽培資料



2024年5月10日



渡辺農事株式会社

営業部 林 大介

- ▶ 既存のミニトマトにない新食感で味が濃く、糖度も高い
- ▶ 果皮はやや厚めで、裂果は比較的少ない。
- ▶ 果重20～25g程度でやや大きめ(3段目までは花数が少なく大きくなり易い)
- ▶ 作型は基本的に周年対応
- ▶ 葉カビ病(Cf4)、ToMV(Tm-2)抵抗性(接ぎ木の際、ToMV適応性に注意)
- ▶ 栽培は比較的容易で、高温期でも抜群の収量性をもつ



ほれまるの特性

## 【育苗】

- ▶ 発芽適温は25～30℃なので、播種床は25℃を基本とする
- ▶ 初期生育は強くなりすぎないように注意する

## 【定植】

- ▶ 適切な圃場施肥設定 (N:P:K=8～10kg:15～20kg:15～40kg) を基本とする
- ▶ 若苗、老化苗定植を避ける
- ▶ 追肥は、10a当たり2kgずつ 窒素と加里主体で追肥する。

## 【台木】

- ▶ 台木は土壌病害により選択するが、Tm-2、Tm-2a型を使用すること



ほれまるの育苗～定植

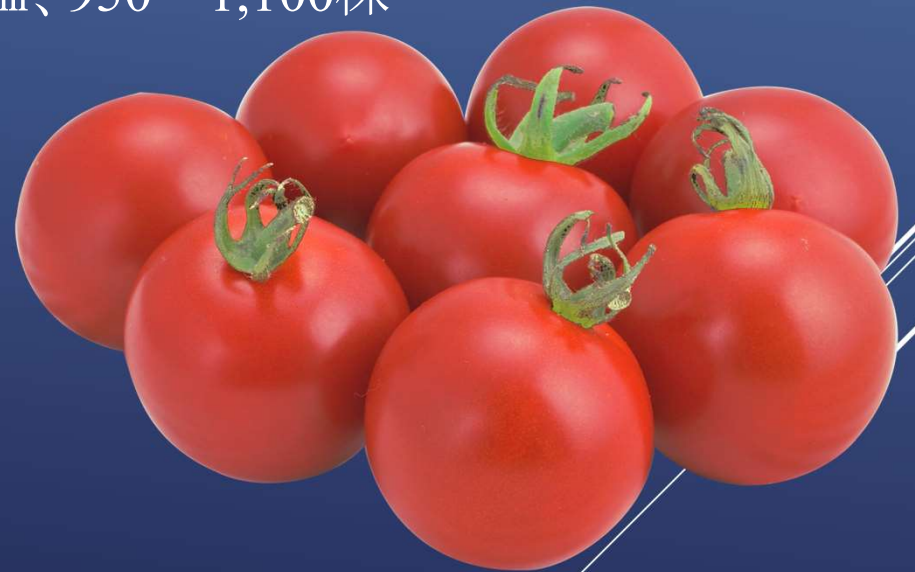
- ▶ 高温期、低温期は草勢を保つために肥料切れを起こさないような管理
  - ※草勢はややおとなしめなので、Nを中心に積極的に追肥を
- ▶ 裂果軽減のためにもこまめな灌水も大切
- ▶ 生育適温は日中25-30℃、夜間10-15℃
- ▶ 低段の花数はやや少ないのでやや果実が大きくなる傾向あり
- ▶ わき芽を除去することで草勢を維持する
- ▶ 節間が狭いので、誘引を早めに行って折れを防止する



ほれまる 栽培上の注意



- ▶ 直立1本仕立て 夏秋どり 株間40cm 2,500株/10a
- ▶ 斜め誘引 長期どり1本仕立て45～50cm、1,900～2,100株
- ▶ 斜め誘引 長期どり2本仕立て90～100cm、950～1,100株



ほれまる 栽植密度

## 【6月下旬～7月上旬～スタート】

この時、草勢を維持するために開花房を除去することも有効。また8月上旬の収穫量を抑えようと事で草勢を維持して9月以降の果重確保を狙います。

- ▶ 花数はシングル10～12、3段以降のダブルで20花前後。
- ▶ 果重は低段で25～30、中段で25g前後、上段で20g～25前後
- ▶ 7月は整枝、誘引をして、追肥は8月入ってから行い始める。
- ▶ 追肥は液肥で2kgずつ行う。
- ▶ 第3花房開花期から各花房開花期ごとに追肥する。尚、草勢が旺盛な場合は追肥を省略する。

# ほれまるの収穫



第一花房の1花が開花してから定植

\* 開花前の定植は草勢が強くなりやすく、複数回化後の定植では草勢は弱くなります。

光合成適温 25～28度

最適地温 22度

最低気温 10度

\* 10度以下にならないようにトンネル・内張りカーテンなどで保温



ほれまるの生理生態

定植後は地温を下げないように、灌水を控える。

▶ 活着後は3段開花まで、灌水は控えめ。

※4～5日経った朝、葉先の水滴が上がらない場合→少量の灌水を行い活着を促す。

▶ その後、草勢に応じて追肥や灌水量を増やす。

→根張りを充実させる。

→5段目開花以降は着果負担が大きくなるので、草勢維持に努める。

▶ この時期は、気温も高く蒸散量も激しく消耗するので、

1日当たりの灌水目安を、

1,2～1,5 $\frac{\text{リットル}}{\text{株}}$  (1,000～1,300 $\frac{\text{リットル}}{100\text{坪}}$ )とし

1～2日毎に行う。



# ほれまるの灌水



## 【時期と施肥量の目安】

1回目の追肥開始→第3花房開花期から

→1回当たりの窒素分量は0.5～1kg/10a

2回目は第4花房の頃(それ以降も各花房開花期毎)

→1回当たりの窒素分量は0.5～1kg/10a

※草勢の強弱や葉色の濃淡などから判断

→1週間の施用窒素量は1～1.5kg/10a



# ほれまるの追肥

トマトーンは気温25℃以下で100倍、25℃以上で200倍が目安。

- ▶ 重複でホルモン処理をすると変形果の原因となるので注意（食紅などの付け色を加用して防ぐと良い）。  
ホルモン処理は温度の低い時間帯にする。



ほれまるのホルモン処理

## 1) 主枝1本仕立て直立整枝法

- ▶ 通常の栽培で主に用いられる整枝法(収穫段数6~7段程度の場合)。
- ▶ 支柱やひもで直立に誘引する。植物体への受光体制がよく、下位葉部まで日光が通りやすいが、長期どりには不向き。

## 2) 斜め誘引整枝法

- ▶ 長期どり栽培向き(10~15段収穫) 2段目から徐々に斜め方向に誘引して、身の丈の空間で10段以上の生育空間を確保する。  
→2段目は斜め45度方向へ、4段目から斜め30度に誘引していく。

※誘引角度が低すぎると生長点の草勢が弱くなり  
生育が遅くなるので注意！

※この整枝方法で長期間収穫する場合は、主枝先端  
部分をUターンする方法が多い。



# ほれまるの整枝・誘引

## 【摘果】

- ▶ 玉揃いを良くするために、摘果(摘花)を行う。

## 【摘葉】

- ▶ 収穫が終了した花房までの葉は、摘葉しても収量や品質に影響がないため摘除する  
→病気の発生軽減
  - ▶ 過繁茂の場合は、1回につき3~4枚の葉を  
先端から半分ほどに切って草勢を弱める。
- ※夏季は果実に直接光が当たらないように、  
花房を畝の内側に向ける、上位葉のわき芽を  
残して日陰を作るなどする



ほれまるの摘果・摘葉



### 【芽かき】

- ▶ 栽培途中の脇芽は二葉程度の時に早めに行なう。

### 【摘芯(芯止め)】

- ▶ 9月上旬に最終収穫目標果房の上二枚の葉を残して摘心する。  
果実の生育を早める。



ほれまるの芽かき・摘芯(芯止め)

7～8月の盛夏では、高温による障害(花とび、日焼け果、軟果)を軽減するために被覆資材を利用する。

▶ 被覆期間 7月下旬～8月中旬

▶ 遮光時間

10:00～14:00を目安※実際は掛けっぱなしが多い。

▶ 遮光率

30～40%を目安



ほれまるの高温対策

樹が強いと1~3段に25 g以上が出るため、草勢を弱めるには、  
わき芽出して着果させて芯止め、わき芽かきを遅らせる、かん水減らす、  
または誘因角度下げる、若苗を植えない、  
など対策が必要です。

食感はサクサクというよりサクッです。  
かん水多めで好い食感になります。



ほれまるの果実サイズを落としたいと  
き

## 【第3果房以降に多く見られる生理障害】

### ① グリーンバック果

グリーンバック果は様々な要因が関係して発生するので、環境や肥培管理など、一つずつ原因をつぶしていく必要があります。

2023年は記録的な猛暑の影響で、各地で発生が多く見られました。

#### 【症状】

ガク(へタ)周辺が着色せず、緑色掛かった状態。食べるとガリッとした食感。

#### 【発生条件】

- ・強草勢、窒素の多用(追肥時含む)、白熟期ころの高温などが考えられる。
- ・果実に直射日光が当たり、赤色色素(リコピン)が生成されない。



# ほれまるの生理障害



## 【第3果房以降に多く見られる生理障害】

### ① グリーンバック果

#### 【対策】

- ・草勢が強くなるような施肥・水管理。
- ・追肥時、1回当たりの窒素施用量を控えめにする  
(例:N-0.5kg/10a)
- ・ハウス内気温で、高温条件を避ける。
- ・直射日光が当たらない様、遮光資材の利用や葉で果実を隠す。



ほれまるの生理障害

## 【第3果房以降に多く見られる生理障害】

### ② 軟果

#### 【症状】

- ・着色過程で緑から赤になるのが早く、赤くなった部分が軟らかくなっている。
- ・多くが片熟み果(部分着色果)で、ゼリー部分が水っぽい。

#### 【発生条件】

- ・春から初夏にかけての1～2段目で発生しやすい。
- ・高温条件下、急激な吸水や給肥の場合。

#### 【対策】

- ・急激な吸水や給肥の施用を避ける。
- ・適温管理に努める。
- ・収穫遅れに注意



ほれまるの生理障害

## 【第3果房以降に多く見られる生理障害】

### ③ ロケット果

#### 【症状】

- ・本来丸型になる果実が縦長になり先端が尖る(ロケットのような形状)

#### 【発生条件】

- ・房の先端の果実に発生しやすい。
- ・ホルモン処理をする花の時期が早い。
- ・気温が28℃以上で最低気温が22℃以上の、昼夜温度格差が少ない条件が2～3日続き、この時期に肥料不足となる場合。
- ・気温が28℃以上の場合、花粉ができにくいため、弱い花に無理やりホルモンで着果させると発生。



ほれまるの生理障害

## 【第3果房以降に多く見られる生理障害】

### ③ ロケット果

#### 【対策】

- ▶ 開花初めまでにホルモン処理を実施する。
- ▶ 高温期のホルモン処理濃度は140～200倍と薄めの倍率にする。



ほれまるの生理障害